論文

メッケル少佐の関ヶ原視察とメッケル伝説
－司馬遼太郎氏の発言を検証する－

白　峰　　旬

はじめに

関ヶ原の戦いに関する都市伝説のような話として、明治時代にドイツ陸軍から陸軍大学校に教官として招聘されたメッケル少佐が、関ヶ原の古戦場に来て両軍の布陣図を見た結果（メッケル少佐は実際の勝敗の結果を知らされていなかった）、石田三成方の勝ちと即座に断言した、という話が現在でも広く流布されている。

この話（以下、メッケル伝説と略称する）は、昭和45年（1970）度にＮＨＫ総合テレビで放送された番組『日本史探訪』の「関ヶ原」の回における司馬遼太郎氏の発言によって、広く流布することになった。

筆者（白峰）も小学生の頃（当時10歳）、テレビ番組の『日本史探訪』（「関ヶ原」の回）において司馬氏が満面の笑みで自信満々にこのこと（メッケル伝説）を語っているのを自宅の白黒テレビで見たことをよく記憶している。

当時は、現在のようにテレビ放送での歴史番組がほかになかったこと、ＮＨＫ総合テレビで全国放送されたこと、昭和の文豪である司馬氏の発言であったこと、などから、その後の影響力は計り知れないものがあった。

乃至政彦『戦国の陣形』(1) では、このメッケル少佐の逸話（本稿でのメッケル伝説に該当する）について、①メッケル少佐が日本にいたのは明治18年（1885）から同21年（1888）までの4年間であった、②参謀本部の関ヶ原合戦図は明治26年（1893）が初版であり、メッケルがドイツに帰国してから5年後であるからメッケルが見た「陣形」は参謀本部の作ではなかったことになる、③明治25年（1892）の神谷道一『関原合戦図志』の作図もメッケル帰国後である、④メッケルが来日する以前だと、古地図の類（徳川時代に流布した布陣図）しかないが、このような曖昧な作図で瞬時にどちらの勝利だと外国人（引用者注：メッケル）が判断するのは不可能だろう、⑤当時の時代背景を考えると、「西軍の勝ちだ」発言の実否はとても疑わしいといえる（下線引用者）、⑥メッケルが来日するまで、わが国には近代的な戦史研究の土台が確立されていなかった、⑦こうした疑義がある以上、「西軍の勝ちだ」は創作された逸話として見るべきだろう（下線引用者）、という点が指摘されている。

このように、近年ではメッケル伝説について、否定的な見解が出されているが、本稿では改めてこのメッケル伝説について検証したい (2)。

なお、以下の司馬遼太郎氏、海音寺潮五郎氏の見解の検討において、『司馬遼太郎の日本史探訪』については筆者（白峰）は知っていたが、司馬遼太郎『歴史と風土』、海音寺潮五郎『武將列傳』については筆者（白峰）は知らなかった。この両書籍については、machida77氏のブログ『火薬と鋼』の「「関ヶ原でメッケルは西軍が勝つと

言った」件」[3] から御教示を得たので御教示に感謝したい。

1. 司馬遼太郎氏のメッケル伝説に関する発言内容

メッケル伝説に関しては、司馬遼太郎氏の発言が著名である。管見によれば、メッケル伝説に関する司馬氏の発言には、以下のように２つのものが存在する。２つとも司馬氏の発言内容を活字化したものであり、司馬氏が執筆した著作物ではない点には注意する必要がある。

（A）『司馬遼太郎の日本史探訪』[4]

司馬　陣地配備の戦術的な立場からいけば、石田方の勝ちなんですよ。徳川方はいかにしても負ける配置です。

このことについては、ａたしか明治十八年だったと思いますが、誕生したばかりの明治陸軍が、近代化するためにドイツの参謀本部からクレメンス・メッケルという少佐を陸軍大学校の教官に招聘（しょうへい）して、作戦の立て方をけいこするんです。メッケルという人は、当時世界的な戦術家だったモルトケの愛弟子（まなでし）ですが、ｂそのころの陸軍大学はドイツ風で、参謀旅行というのがありましてね、参謀をつれて現地に行って、地図によって架空の作戦を立てて訓練をしたものなんです。ｃメッケルは関ヶ原に来て、合戦を彼自身がやったんですね。ｄその時メッケルは、まずこの配置図を見まして、石田方の勝ちと言っちゃうんです。

石田方の勝ちというのは、これは歴史と違うんで、ｅ学生たちがメッケル先生に、家康が勝ったんですがと言っても、いや、そんなことはない、そんな馬鹿なことはない、石田方の勝ちだと、何度も言うんです。

松本　関ヶ原の合戦が始まる前は、たしかに西軍の陣取りというものは、大坂から近いだけに非常に有利なんです。先制布陣であった。

ところが、この陣取りというのは、西方の各武将がほとんど勝手に陣を取ったもので、きびしい命令統制によったものではない。中には戦う気持ちが全然ない武将も少なくなかった。形式的な西軍の総大将の毛利（もうり）秀元（ひでもと）をはじめ安国寺恵瓊（あんこくじえけい）、長宗我部盛親（ちょうそかべもりちか）みんなそうでしょう。小早川秀秋（こばやかわひであき）は東軍と密約している。脇坂（わきざか）、朽木（くつき）といった天満山の横腹にいた連中も東軍からの誘いを受けている。ｆこうした連中が合戦が始まっても全然動こうとしないんですから、これは戦力ではない。だから陣型（ママ）（陣形ヵ）だけでは判断がつかないと思うんです。（下線引用者）

上記の司馬氏の発言（以下、司馬発言Ａと略称する）は、ＮＨＫ総合テレビで放送された番組『日本史探訪』の「関ヶ原」の回における発言である。

上記のように司馬氏の発言のあとに、松本清張氏が発言しているが、松本氏はメッケル伝説について全く触れていない点が印象的である。このことは、松本氏がメッケル伝説について全く関知していなかったことを示している。

昭和の文豪である両氏が、メッケル伝説の扱いについて、このように対照的である点は、当時の文壇におけるメッケル伝説の流布について考えるうえで参考になろう。

ちなみに、『日本史探訪』の「関ヶ原」の回がＮＨＫ総合テレビで放送されたのは、昭和 45 年（1970）度であり、この時点で、司馬氏は 47 歳、松本氏は 61 歳であった。

司馬発言Ａについて検討すると、下線ａは、明治陸軍が明治 18 年にドイツ参謀本部からメッケル少佐を陸軍大学校の教官に招聘した、とする内容であり、このことは歴史的事実と合致する[5]。下線ａにおける「作戦の立て方をけいこする」というのは、下線ｂにおける「参謀旅行」を指すと考えられ、その具体的内容が「地図によって架空の作戦を立てて訓練をした」（下線ｂ）ということになる。

後述するように、参謀旅行には、参謀官を専修員とした参謀官参謀旅行と、陸軍大学校の学生を専修員とした学生参謀旅行（陸大参謀旅行）があるが、下線ｂにおける「そのころの陸軍大学はドイツ風で、参謀旅行というのがありましてね」と「参謀をつれて現地に行って」というのは両者（参謀官参謀旅行と学生参謀旅行）を混同しているように受け取れる。

下線ｃは、メッケルが参謀旅行の統裁官として関ヶ原に来た、というように受け取れる。この点ついては、このことが歴史的事実であるかどうか検討する必要があるので、この点については後述する。

下線ｄは、メッケル伝説の核心的部分であるが、メッケルが見た「配置図」（下線ｄ）が、どのような図であるのかが問題である。江戸時代に流布した関ヶ原の戦いの布陣図なのか、あるいは、旧参謀本部編纂『日本戦史関原役』の有名な関ヶ原の戦いの布陣図なのか、下線ｄでは、単に「配置図」（下線ｄ）とするのみで、それ以上の具体的な言及がない点には注意する必要がある。なお、後述するように、司馬発言Ｂの下線ｆによれば、江戸時代に流布した関ヶ原の戦いの布陣図としている。

そして、「石田方の勝ちと言っちゃうんです」（下線ｄ）という点についても、メッケルが本当にこうした発言をしたのかどうか検証が必要である。このことは、「いや、そんなことはない、そんな馬鹿なことはない、石田方の勝ちだと、何度も言うんです」（下線ｅ）についても同様であり、メッケルが本当にこうした発言をしたのかどうか検証が必要である。

下線ｂでは「参謀をつれて現地に行って」としているのに対して、下線ｅでは「学生たちがメッケル先生に、家康が勝ったんですがと言っても」としていて、この参謀旅行の専修員が参謀官であったのか、或いは、陸軍大学校の学生であったのか、司馬氏の発言内容が混乱しているのは明らかである。

下線ｆは、松本氏の発言であり、実際の関ヶ原の戦いでは戦力として動かなかった諸将もいたので、「陣型（ママ）（陣形ヵ）だけ」（下線ｆ）では勝敗の判断がつかない、というものであり、司馬発言Ａに対する批判と受け取れる。

上述したように、松本氏は上記の発言の中で、メッケル伝説については全く触れていない。このことをどのように考えるべきかは今後の課題かもしれない。

（Ｂ）司馬遼太郎『歴史と風土』[6]

その後、関ヶ原に興味を持ちましたのは、ａメッケル（一八四二～一九〇六）というドイツの参謀少佐の

ことを調べていた時です。

（中略）

こうしてむりやりドイツ風をふかせておいて、b明治十七年にメッケルを日本へ招聘したわけです。メッケルは大モルトケ（ドイツ・軍人・一八〇〇～九一）の愛弟子で、モルトケが考えている最高の秀才とドイツの参謀本部ではいわれていました。

（中略）

結局、そういうドイツの参謀本部をメッケルが日本に移植した。c メッケルは参謀教育をするのについては現地へ行くのです。これが当時のドイツふうですね。古戦場へ行く。d 古戦場で最大のものは関ヶ原です。関ヶ原へ参謀たちを連れていって、メッケルが統裁官になり、参謀を石田方や徳川方にさせて作戦の訓練をするわけです。e その時メッケルはさほどの予備知識なくして関ヶ原盆地へ入っていったのです、両軍の配備地図だけを持って。f 両軍の配備地図というのはもう徳川期にできておりましたですからね。メッケルはそれをじっと見ていて、「石田方の勝ち」とまず宣言したわけです。

誰が見ても石田方の勝ちなんです。先にふれましたように、石田方は大垣から夜行軍によって戦場に先着していた。それ以前から到着していた部隊もある。それぞれが丘陵のいいところに場所を占めており、その丘陵たるや、東軍が赤坂から入るには一つしか道がない。赤坂というのはやや低い土地で、その低地から大げさにいえば登るようにして二列縦隊ぐらいで東軍が入ってこなければならない。これでは袋のネズミになるわけであり、部署からいえば、まさに石田方の勝ちなのです。

ところが、g 当時の参謀 ── 日本人将校たちが、いや、そうじゃないんです、石田方が負けたのです、といっても、メッケルはそんなバカなことがあるか、これは石田方が勝ったのだ、といいはってきかなかったらしい。

h しかたがないので当時の政治情勢と徳川家康の威望を説明したわけです。家康が戦う前にすでに一種の世間の機運と自分の威望を計算しつくして、敵に対して内部工作をしていたこと、そして裏切り、もしくは戦場で中立をとる者が続出するであろうという期待を持っていたし、その手もうっていた ── それで結果がメッケルの考えたのと違うことになったのだ、と説明したのですね。

i するとメッケルはすぐに、ああ、わかった、政略は別だ。純粋に軍事的にみれば石田方の勝ちだが、その上に政略という大きな要素がのればこれはまた別だ、といったという話です。

j こういうことを知って、関ヶ原というのはいよいよおもしろいな、と思うようになったのです。k 昭和三十年代のはじめのころだったでしょうか。それでいつか関ヶ原を小説に書いてみたいと考えたのですが、当時は力量がそこまでいたりませんでしてね。（下線引用者）

上記の司馬氏の発言（以下、司馬発言Ｂと略称する）は、『司馬遼太郎全集』第１期 32 巻（1971 年９月～ 74 年４月刊）の月報のために語り下ろしたものであり[7]、「 ── 談。昭和四十六年十一月九日、自宅にて ── 」[8] と記されている。

よって、司馬発言Ｂは上記の司馬発言Ａよりあとのことになる。司馬発言Ａと比較して、司馬発言Ｂは内容が詳しくなっている。

司馬発言Ｂについて検討すると、下線ａは、司馬氏がメッケル少佐について調べていた、としている。司馬氏

の小説『坂の上の雲』が「産経新聞」夕刊に昭和43年（1968）4月22日から同47年（1972）8月4日まで連載されていたが[9]、後に刊行された『坂の上の雲』一にはメッケル少佐について出てくる箇所があるので[10]、その関係で、司馬氏はメッケル少佐について調べたのであろう。

前掲『坂の上の雲』一には、参謀旅行について記された箇所があるので[11]、以下に引用する。

参謀旅行というのがある。

これも、フランス陸軍にはない。欧米の他の国にもなく、ドイツだけのものであった。創案者は、モルトケらしい。

統裁官はつねに戦術の大家がこれにあたる。参謀学生をひきつれ、実際の山野を舞台に、「もしあの山ぎわの間道から敵の騎兵一個大隊が出現したらどうするか」

とか、

「この状況下で砲兵は野砲三個中隊しかない。それをどこに置けばいいか」

といったふうのことを統裁官がつぎつぎに質問し、相手の返答がわるければ罵倒し、修正し、さらに戦いをすすめてゆく。戦術は状況と地形によって流動するものだが、それを実際訓練するにはこの参謀旅行ほどいい方法はない。

その第一回の参謀旅行は、明治十八年十一月、茨城県下でおこなわれた。

戦場は、関東平野である。その第一日は利根川のほとりの取手町から開始された。

（後略）

この記載には「参謀学生をひきつれ」とあるので、「参謀学生」とは参謀官と陸軍大学校の学生を指す、と考えられる。

さらに、後に刊行された『坂の上の雲』六の「あとがき」[12]には、ドイツに旅行滞在中の司馬氏のところ（ホテル）へ、大叔父がメッケルだったという人物（青年）が訪ねてくる話が出てくる。このことからすると、司馬氏はメッケルという人物になんらかの思い入れがあったのかもしれない。

下線ｂでは、メッケルを日本へ招聘した年を明治17年（1884）としているが、上述したように、同18年が正しい。

下線ｃの「メッケルは参謀教育をするのについては現地へ行くのです」というのは参謀旅行を指している、と思われるので、メッケルは参謀旅行で「古戦場」（下線ｃ）へ行った、としている。

参謀旅行で、実際に古戦場に行ったのかどうか、という点の検討については後述する。

下線ｄは、「古戦場で最大」の「関ヶ原へ参謀たちを連れていって、メッケルが統裁官になり」「参謀を石田方や徳川方にさせて作戦の訓練をする」としている。

この記載からは、参謀官参謀旅行で関ヶ原へ行き、メッケルが統裁官になって、参謀を石田方と徳川方に分けて「作戦の訓練」をした、ということになるが、参謀官参謀旅行で関ヶ原へ実際に行ったのかどうか、という点の検討については後述する。

そして、参謀旅行の内容が、古戦場（関ヶ原）を現場として、当時の戦いの石田方と徳川方という想定で「作

戦の訓練」をしたのかどうか、という点の検討についても後述する。

下線ｅの「予備知識なくして」というのは、メッケルが関ヶ原の戦いの勝敗の結果を知らずに、という意味であろう。

下線ｅでは、メッケルが「関ヶ原盆地へ入っていった」と明言している。この点は、メッケルが参謀旅行で実際に関ヶ原へ来たのかどうか、という点の検証が必要であり、この点については後述する。

メッケルが関ヶ原に持参したのは「両軍の配備地図」（下線ｅ、下線ｆ）であり、その「両軍の配備地図」（下線ｆ）というのは、「もう徳川期にできておりました」（下線ｆ）としていることから、江戸時代に流布した関ヶ原の戦いの布陣図ということになる。

よって、司馬発言Ｂと旧参謀本部編纂『日本戦史関原役』の布陣図は全く無関係であることには注意する必要がある。

そして、その「両軍の配備地図」（下線ｆ）をメッケルが「じっと見ていて、「石田方の勝ち」とまず宣言した」（下線ｆ）としている。

下線ｄ、下線ｅ、下線ｆの部分は、メッケル伝説の核心部分であり、特に下線ｅ、下線ｆの部分は、慎重な事実関係の検証が必要である。参謀旅行で江戸時代に流布した関ヶ原の戦いの布陣図を使用するなどということがあり得るのか、という点、メッケルが関ヶ原の戦いの勝敗を判定する、などということがあり得るのか、という点、についての検証については後述する。

下線ｇは、関ヶ原の戦いの勝敗の結果を聞いたにもかかわらず、メッケルが石田方の勝ちを強硬に主張した、という内容であるが、この点も事実関係の検証が必要であり、この点についても後述する。

下線ｇでは、関ヶ原の戦いの勝敗の結果を説明したのが「当時の参謀 ── 日本人将校たち」となっているが、上述した司馬発言Ａでは「学生たち」（司馬発言Ａの下線ｅ）となっているので、この点は司馬発言Ａと司馬発言Ｂで矛盾している。

下線ｈは、小早川秀秋の裏切りなどにより、実際の勝敗の結果は、徳川方の勝ちになった、ということを説明した、という意味であろう。

下線ｉは、この説明を聞いて、メッケルは政略と軍事は別であり、勝敗の結果に納得した、という意味であろう。この下線ｉのメッケルの発言についても、実際にこうしたことを言ったのかどうか、検証が必要であり、この点については後述する。

下線ｊには「こういうことを知って」とあるので、メッケル伝説（司馬発言Ｂ）は、司馬氏が創作した話ではなく、司馬氏がだれかから聞いて（或いは、文字資料を読んだ可能性もあるが）、発言していることを示している。

下線ｋは、司馬氏がメッケル伝説（司馬発言Ｂ）を知ったのが「昭和三十年代のはじめのころだったでしょうか」としている。

司馬氏は、大正 12 年（1923）生れであるから、「昭和三十年代のはじめのころ」（下線ｋ）を昭和 30 年（1955）～同 34 年（1959）と仮定すると、32 ～ 36 歳であったことになる。

司馬氏の略歴 (13) によれば、昭和 31 年（1956）、産経新聞社大阪本社勤務の傍ら短編小説「ペルシャの幻術師」で第 8 回講談倶楽部賞を受賞して文壇にデビューしている。この短編小説「ペルシャの幻術師」は海音寺潮五郎

氏の絶賛を受けて同賞を受賞した[14]。海音寺氏は、第8回講談倶楽部賞の選考委員の一人であった[15]。

昭和33年（1958）7月には「司馬遼太郎」としての初めての著書『白い歓喜天』が出版され[16]、昭和34年（1959）には『梟の城』で1959年下半期の第42回直木賞（直木三十五賞）を受賞している[17]。

司馬氏は、昭和36年（1961）に産経新聞社を退職して、専業作家になった[18]。

こうした司馬氏の経歴（昭和30年代前半）を見ると、昭和31年の文壇デビュー（第8回講談倶楽部賞受賞）、昭和34年の第42回直木賞受賞が大きな節目であったことがわかる。

当時の司馬氏は産経新聞社に勤務していたので（退職は昭和36年）、産経新聞社に入ってくるいろいろな情報の中でメッケル伝説の話をだれかから司馬氏が聞いた可能性も考えられる。

当時の司馬氏の生活の拠点が関西地方であったことを考慮すると、メッケル伝説の話は関西地方で部分的に流布していた話だったのだろうか。

他の可能性としては、昭和31年の講談倶楽部賞受賞、昭和34年の直木賞受賞の表彰式で上京して当時の文壇の関係者から聞いた可能性も考えられる。

後述するように、海音寺潮五郎氏はメッケル伝説（海音寺氏はメッケルとは明記していないが）に近い話を作品に執筆しているので、司馬氏が昭和31年の講談倶楽部賞受賞の表彰式で上京して、選考委員の一人であった海音寺氏と会った際に、メッケル伝説（或いはメッケル伝説に近い話）を海音寺氏から聞いた可能性も考えられる。ただし、後述するように、海音寺氏が執筆したメッケル伝説に近い話の内容は、上記の司馬発言Ａ、司馬発言Ｂのメッケル伝説の内容とは細部では異なる箇所がある。

なお、上述したように松本清張氏は、ＮＨＫ総合テレビで放送された番組『日本史探訪』（昭和45年度放送）の中の発言でメッケル伝説については全く触れていないことから、メッケル伝説が文壇で広く流布していた話ではなかったことも考えられる。

以上のように、上記のメッケル伝説（司馬発言Ａ、司馬発言Ｂ）は、わくわく感満載の非常によくできた話であり、聞く者を魅了するのであるが、これが歴史的事実に基づいた話であるのか、或いは、何者かが捏造した全くの作り話（虚偽のホラ話）であるのか、或いは、司馬氏がこの作り話（捏造された話）をだれかから聞いて、すべて信じ切っていたため、上記の司馬発言Ａ、司馬発言Ｂのような発言になったのか、という点の検証が必要である。

そして、メッケル伝説について、司馬氏が発言した内容のみが残っているのであり、司馬氏が作品として執筆したものではなかった点にも留意する必要があろう。

2. 海音寺潮五郎氏が執筆したメッケル伝説に近似した話の内容

▼海音寺潮五郎『武將列傳四』の「石田三成」[19]

※引用する際に、引用文中の旧字体は新字体に変えた。

関ガ原戦は負けるべくして負けた戦争だ。ａ明治年代にドイツの有名な戦術家が日本に来て、ｂ関ガ原に遊び、ｃ案内の日本陸軍の参謀から、両軍各隊の配置・兵数を聞いて、ｄ「これでどうして西軍が敗れたのだろう。負けるはずはないのだが」

と不審がつたところ、e参謀が戦い半ばに小早川秀秋が裏切したことを告げると、手を打つて、「そうだろう、そうだろう」と言つたという話がある。f ぼくはこのドイツの戦術家の説を信じない。兵数と陣形だけで数学的にことを考える参謀的迷妄と思つている。小早川秀秋の裏切が決定打になつていることは事実だが、g 敗因は他に無数にある。それはすでに述べた。（下線引用者）

上記の海音寺氏の執筆内容（以下、海音寺見解と略称する）は、海音寺氏の著書『武將列傳四』の中の「石田三成」に書かれた内容である。

海音寺氏の著書『武將列傳四』が文芸春秋新社から刊行されたのは昭和36年（1961）であるが、（海音寺氏は明治34年〔1901〕の生れであるから、昭和36年の時点で60歳であった）、それよりも先に、この「武將列傳」は月刊小説誌『オール讀物』（文芸春秋新社）に連載されていた。「武將列傳」が『オール讀物』に連載が開始されたのは昭和34年（1959）である[20]。

よって、上述したように、司馬氏がメッケル伝説を知ったのが「昭和三十年代のはじめのころだったでしょうか」（司馬発言Bの下線k）としていることと年代的にほぼ符合する点は注目される。

海音寺見解について検討すると、下線aでは、明治時代に日本に来た「ドイツの有名な戦術家」としていて、メッケル少佐というように個人名を明示していない点が、司馬発言A、司馬発言Bと異なっている。

明治時代に来日したドイツ軍人でメッケル少佐以上に有名なドイツ軍人というのはいなかったと思われるので、「ドイツの有名な戦術家」がメッケル少佐を指すと想定しても問題はなかろう。

ただし、海音寺氏がなぜメッケルと書かずに「ドイツの有名な戦術家」と書いたのか理由は明確ではないが、下線fで「ぼくはこのドイツの戦術家の説を信じない」と批判していることから、そのことと関係するのかもしれない。或いは、昭和35年前後の当時（戦後まだ15年しか経っていないので）、メッケルと名指しして書くとなんらかの支障があったのだろうか（上述のように、司馬発言Aは昭和45年度、司馬発言Bは昭和46年〔1971〕であり、10年くらい後になる）。

下線bでは「関ガ原に遊び」としていることから、参謀旅行のような公務ではなく、私的な旅行で関ヶ原に来た、ということになる。この点も司馬発言A、司馬発言Bと異なっている。なお、下線cに「案内の日本陸軍の参謀」とあることから日本陸軍の参謀将校が同行したことになる。

「ドイツの有名な戦術家」をメッケル少佐と仮定すると、メッケル少佐が私的な旅行で関ヶ原に来たことがあるのかどうか、来たことがあるとすれば、その私的な旅行に日本陸軍の参謀将校が同行して案内をしたのかどうか、ということを検証する必要があるが、この点については後述する。

下線cでは「案内の日本陸軍の参謀から、両軍各隊の配置・兵数を聞いて」としていることから、両軍の布陣図を見て「ドイツの有名な戦術家」（本稿ではメッケルと仮定する。以下、同様）が勝敗を判断したのではないことになる。この点も司馬発言A、司馬発言Bと異なっている。

下線dは、「ドイツの有名な戦術家」が西軍の敗北を不審に思った、としているのであり、石田方の勝ちと即座に断言したとする司馬発言A、司馬発言Bとは内容が異なっている。

下線eは、「ドイツの有名な戦術家」が参謀から小早川秀秋の裏切りを聞いて、勝敗の結果に納得した、として

いる。

この下線ｃ、下線ｄ、下線ｅの「ドイツの有名な戦術家」の発言や参謀とのやりとりについては、事実であるのかどうか真偽不明である。

下線ｆは、海音寺氏が「このドイツの戦術家の説」を信用せず、「兵数と陣形だけ」で勝敗は決まらない、と述べていることになる（下線ｆの「数学的にことを考える」の「こと」とは勝敗という意味であろう）。このことは下線ｇの「敗因は他に無数にある」につながっていると思われる。

下線ｆの「兵数と陣形だけ」で勝敗は決まらない、としている点は、上述の番組『日本史探訪』における松本清張氏の発言の下線ｆとも共通している。

このように、海音寺見解は、司馬発言Ａ、司馬発言Ｂと比較すると、微妙に内容的違いがある点には留意する必要がある。

では、海音寺氏は、上記の「ドイツの有名な戦術家」（下線ａ）の話をどこから情報として入手したのだろうか。

海音寺氏の著書『武將列傳四』の「あとがき」[21]には「人物列傳（武將列傳ヵ）を書きはじめてから、ちようど満二年が立つた。書きはじめた頃は月に三人は書けると思つていた。資料を集めるのが三日、読むのが三日、書くのが四日、都合十日ですむから（後略）」（下線引用者）と書かれている。

このことからすると、海音寺氏は３日程度で資料を集めていたことになる。「資料」と書かれていることからすると、文字資料と思われる。当時はインターネットなどなかったから、図書館などで調べたと推測されるが、３日程度で集めた資料に上記の「ドイツの有名な戦術家」（下線ａ）の話が載っていたことになる。

しかし、「ドイツの有名な戦術家」（下線ａ）の話（メッケル伝説）について書かれた文字資料（海音寺見解、司馬発言Ａ、司馬発言Ｂの情報源になった文字資料）は現時点では発見されていない。上述したように、海音寺見解と司馬発言Ａ、司馬発言Ｂは内容的に異なっている点があることから、海音寺見解と司馬発言Ａ、司馬発言Ｂの情報源は、別々の情報源であった可能性が考えられる。

或いは、海音寺見解よりも司馬発言Ｂは、内容的にかなり詳しくなっていることから、「昭和三十年代のはじめのころ」（司馬発言Ｂの下線ｋ）に司馬氏が海音寺氏から聞いたと仮定して、それにプラスして司馬氏が他の情報源からより具体的な話を追加して入手した可能性も考えられる。

いずれにしても、このあたりの情報源の検討については推測の域を出ない。

3. メッケル少佐の関ヶ原視察

海音寺見解については、メッケルが私的な旅行で関ヶ原に来たことがあるのかどうか、という点が問題になる。前掲・林三郎『参謀教育』[22]の「付表第一　メッケル教師動静略表」によれば、メッケルは夏季休暇、冬季休暇の期間中に日本国内の各地に「地理実査」に行っている。この「地理実査」は、メッケルが夏季休暇、冬季休暇の期間中に行っていることから、公務である参謀旅行とは異なり、メッケルの私的な旅行と言えよう。

複数例があるメッケルの「地理実査」の中で、明治18年（1885）12月29日にメッケルは「地理実査」のため京阪地方へ出発している。その旅程において、

明治 19 年 1 月 4 日夜、名古屋着、

1 月 7 日名古屋出発、岐阜県大垣へ

1 月 8 日大垣出発、関ヶ原を経て滋賀県彦根へ

1 月 9 日彦根出発、夜京都着

という行程がわかる。

その点をさらに調べるために、「レファレンス協同データベース」[23] において「メッケル」で検索すると、「ドイツ陸軍将校・クレメンス・メッケルが関ヶ原を訪問した際の様子を伝える当時の新聞、雑誌、書籍等の文献はないか。」という「質問」があることがわかり、この「質問」に対して、「1886 年 1 月 13 日付けの岐阜日日新聞に関連記事があった。」という「回答」が載せられている（提供館は岐阜県図書館）。

その「回答プロセス」には①～③の記載があるが、①は「以下、当館所蔵資料を確認したが、クレメンス・メッケルが関ヶ原を訪問した際の様子について、詳細な記載はなかった。」としているので①の詳しい調査結果は省略して、②と③を以下に引用する。

②質問者提供の情報に基づき、1886 年 1 月 8 日前後の岐阜日日新聞を岐阜新聞データベースで確認。1 月 8 日付の紙面 2 頁にメッケル氏についての記事を確認したが、県職員が出迎えに出張したことを報じるものであり、関ヶ原を訪問した際の様子について報じる内容ではなかった。（下線引用者）

③別件レファレンスを調査中、1886 年 1 月 13 日付けの岐阜日日新聞（2 頁）に関連記事を確認。メッケル氏が 1 月 7 日に大垣に到着・宿泊、翌日の午後に関ヶ原を訪問したこと、首塚が鉄道敷地の地下にあると説明を受けたことなどを報じる内容であった。（下線引用者）

以上のことから、岐阜県図書館[24] による明治 19 年（1886）1 月 8 日付、同年 1 月 13 日付の岐阜日日新聞の調査の結果、(1) 岐阜県の県職員がメッケルを出迎えるために出張した（この出張が 1 月 8 日のことなのかどうかはこの記載からは不明である）、(2) 1 月 7 日にメッケルが大垣に到着して宿泊した、(3) 1 月 8 日の午後にメッケルが関ヶ原を訪問し、その際に首塚が鉄道敷地の地下にあると説明を受けた、ということが明らかになった。

これらの点をさらに具体的に確認するため、岐阜県図書館の郵送複写サービスを利用して、明治 19 年 1 月 8 日付と同年 1 月 13 日付の岐阜日日新聞の関係記事の紙面の複写（マイクロフィルムからの複写）を取り寄せた。その関係記事を引用すると以下のようになる（下線引用者）[25]。

【明治 19 年 1 月 8 日金曜日第 1302 號】

〇メツ(ママ)ルケル氏　a 陸軍大学校御傭獨逸国教師少佐メツケル氏は、同校学士の授業上に要ずる地理等実査の為め、東海道を経て、昨日當地へ来着さるゝ筈なれば、b 本縣ゟ木村土木課長、及び太田学務課長が出迎ひの為め、笠松村まで出張されたり

【明治 19 年 1 月 13 日水曜日第 1305 號】

〇メツケル氏　　c 獨人メツケル氏ハ、属官一名、通辨一名、其他愛知鎮臺陸軍大尉一名、本縣太田、木村、櫛田の三属官警部と共に、本月七日午後六時三十分、縣下大垣に着せられ、d 同地の玉屋に投宿、翌日、近傍を散歩し、e 慶長の役、東西両軍交戦に関する事蹟沿革等を尋ね、又設役に付ての古記録、古図等を取り寄せ、種々其履歴等を諮問し、f それより舊城郭に登り、中山道、東海道、美濃廻り等の道程、関東方の進撃せし線路、岐阜より大垣、及赤坂、梅谷越を望み、次に西軍敗走に属する線路、淡海より津田驛を経て関ヶ原へ達する順路、或ハ家康の陣取りし赤坂勝山等を視案し、g 城を下て、直ちに腕車に乗じ、関ヶ原へ出発され、其沿道株瀬川の水源を問ひ、垂井驛に至り、南宮山を望み、毛利、安国寺、長曾我部の陣跡を視察し、h 続て野上即ち桃配野に達し、家康が手勢を指揮せし跡を視進んで、関ヶ原に着し、午餐を喫せられ、i 午後同地の戸長及び不破郡書記を案内として、小関村に至り石田三成の陣跡、及家康が首実験せし處を見終て、首級墳を問ひしに、今や鉄道敷地となり二墳の内一墳を没す、との事に、再び其枯骨等は他へ埋替へせしにや、と問れしに、是は其儘敷地下となる旨答へしに、氏ハ暫時黙して潸然涙を催されたりといふ、j それより尚も處々の古跡を探討し、同日の黄昏旅宿に帰られたるよし

下線 a は、陸軍大学校のお雇い教師であるメッケル少佐は、陸軍大学校の授業に必要な地理等の実査のため、東海道を経て、昨日（1 月 7 日）、当地（岐阜県という意味か？）へ到着する予定であるので、としている。この記載からは、メッケルの地理実査の目的が陸軍大学校の授業に関係していることがわかり、冬季休暇中の私的な旅行であっても、公務（陸軍大学校の授業）と関連していることがわかる。

下線 b は、（昨日、つまり 1 月 7 日に）岐阜県庁の木村土木課長と太田学務課長がメッケル少佐を出迎えるため、笠松村（現岐阜県羽島郡笠松町）まで出張した、としている。岐阜県庁の課長クラスの職員 2 人がわざわざメッケルを出迎えるために笠松村まで出張したことは、当時メッケルの扱いが VIP 待遇だったことを示すものであろう。岐阜県庁の土木課長と学務課長が出迎えたことは、地理実査が土木課と関係し、メッケルが陸軍大学校のお雇い教師であることが学務課と関係したからであろう。

下線 c は、メッケルが属官 1 名（陸軍省の職員か？）、通訳 1 名（佐官クラスの陸軍将校か？[26]）、名古屋鎮台（愛知鎮台）の陸軍大尉 1 名、岐阜県庁の 3 名の属官（上述した岐阜県庁の木村土木課長、太田学務課長と櫛田警部）と共に、1 月 7 日午後 6 時 30 分に岐阜県大垣に到着した、としている。

上述したように、1 月 7 日に岐阜県庁の木村土木課長、太田学務課長は笠松村までメッケルを出迎えるために出張しているので、笠松村でメッケルの一行に合流したのであろう。

下線 c の記載によれば、メッケルは 6 名（名古屋鎮台の陸軍大尉 1 名を含む）を引き連れて岐阜県大垣に到着したことがわかるので、冬季休暇中の私的な旅行とはいえ、相当な VIP 待遇だったことになり、またそれだけの有名人だったということなのであろう。

下線 d は、メッケルは大垣の玉屋に宿泊して、翌日（1 月 8 日）に大垣の近辺を散歩したとしている。下線 d では「散歩」と記載しているが、後述するように、1 月 8 日のメッケルの行動範囲は広範囲に及んでいる。

下線 e における「慶長の役、東西両軍交戦に関する事蹟沿革等を尋ね」とは、関ヶ原の戦いに関係する史跡とその歴史的経緯などについてメッケルが尋ねた、という意味であろう。関ヶ原の地元である岐阜県の当時の新聞（岐

阜日日新聞）で、関ヶ原の戦いについて「慶長の役」と記載している点は興味深い。地元の岐阜県では、当時（明治19年当時）、関ヶ原の戦いについて「慶長の役」と呼称していたのであろうか。

関ヶ原の戦いに関係する史跡とその歴史的経緯などについてメッケルが尋ねた、ということは、メッケルが関ヶ原の戦いについて相当な関心を持っていたことがわかる。

そして、下線ｅでは、関ヶ原の戦い（下線ｅにおける「設役」は「該役」の誤植か？）についての「古記録、古図等」を取り寄せて種々その履歴等について諮問した、としているので、関ヶ原の戦いについて相当突っ込んだやり取りをしていたことになる。特に、「古記録、古図等」としている点は注目され、「古図」の中に江戸時代に流布した関ヶ原の戦いの布陣図などが含まれていたとすると、司馬発言Ａ、司馬発言Ｂのルーツがこのあたりにあった可能性も考えられる。

なお、「古図」としているので、メッケルが見たのは、陸軍参謀本部が作成した関ヶ原の戦いに関する布陣図でなかったことは明白である。

下線ｅの関ヶ原の戦いに関するメッケルからの諮問は、前後の文脈からすると、大垣においておこなわれたものである（関ヶ原ではない）点は注意する必要がある。

下線ｆの「舊城郭」とは大垣城天守（後に昭和20年に空襲で焼失）と考えられるので、メッケルは大垣城天守に上って（多分、最上階から）、「中山道、東海道、美濃廻り等の道程」、「関東方の進撃せし線路」（＝徳川家康方軍勢の進撃ルート）、「岐阜より大垣、及赤坂、梅谷越」を遠望し、さらに「西軍敗走に属する線路」（＝石田三成方軍勢の敗走ルート）、「淡海より津田驛を経て関ヶ原へ達する順路」（「淡海」は「近江」という意味）、「家康の陣取りし赤坂勝山等」（家康が最初に陣を構えた岡山本陣跡）を視案した、としている。この場合の「視案」とは遠望して思案した、という意味であろう。

ここで注意したいのは、メッケルが遠望した場所として、徳川家康方軍勢と石田三成方軍勢の決戦地がない点である。つまり、明治19年の時点では両軍の決戦地に関する現地での比定地がなかった可能性も考えられ、そうなると、両軍の決戦がおこなわれておらず、徳川家康方軍勢が進撃し、石田三成方軍勢が敗走する、というように、最初から家康方軍勢による追撃戦であったという伝承が地元ではされていたのかもしれない。

このように、メッケルは大垣城天守最上階から俯瞰したので、明治19年当時は現在以上に周辺の地形等がよく把握できたと思われる。

このようにメッケルが6名を引き連れて大垣城天守の最上階に上り、そこから説明を受けながら関ヶ原の戦いに関係する各地を遠望した光景をイメージすると壮観な印象を受ける。

下線ｇは、メッケルが大垣城天守から降りて、すぐに腕車（＝人力車）で関ヶ原へ向かい、途中、その沿道にある杭瀬川（株瀬川）の水源について質問し、その後、垂井駅（現岐阜県不破郡垂井町）に到着して、南宮山を遠望してから「毛利、安国寺、長曾我部の陣跡」を視察した、としている。

下線ｈにおいて「続て野上即ち桃配野に達し、家康が手勢を指揮せし跡」というのは、家康の桃配山の陣跡（徳川家康最初陣跡・桃配山、現岐阜県不破郡関ヶ原町大字野上1424-1）を指すので、そこを視察してから関ヶ原に到着して昼食をとった、としている。

よって、メッケル一行は、1月8日の午前中、大垣において、関ヶ原の戦い関係の「古記録・古図等」（下線ｄ）

によるメッケルの諮問→大垣城天守からの関ヶ原の戦い関係各地の遠望→人力車で関ヶ原へ移動→南宮山での「毛利、安国寺、長曾我部の陣跡」（下線ｇ）の視察→家康の桃配山の陣跡視察→関ヶ原へ移動して昼食、というように、目まぐるしい行程を精力的にこなしたことがわかる。

下線ｉでは、1月8日の午後に関ヶ原村の戸長と不破郡（関ヶ原村が位置する郡）の書記の案内で、小関村（現岐阜県不破郡関ヶ原町小関）に来て石田三成の陣跡（＝笹尾山の石田三成陣跡）と家康が首実検をおこなった場所（＝徳川家康最後陣跡・陣場野、現岐阜県不破郡関ヶ原町陣場野）を見終わって首級（くびづか）墳（＝首塚）についてメッケルから質問が出て、現在は鉄道の敷地となったため2つの首塚のうち、1つは埋没した、と答えたところ、さらにメッケルは、その「枯骨等」は他の場所へ埋め変えられたのか、と質問したので、これはそのまま鉄道の敷地の下になった、と答えたところ、メッケルはしばらく黙してさめざめと涙を流した、としている。

このように、1月8日の午後は、地元の役人の案内で、メッケルは、笹尾山の石田三成陣跡→陣場野の家康陣跡→首塚を見たことがわかる。

首塚に関するメッケルの落涙は、関ヶ原の戦いにおける戦死者の遺骨がぞんざいに扱われていることへの軍人としての悔しさのあらわれだったのかもしれない。

関ヶ原の戦いの首塚については、現在では東首塚（岐阜県不破郡関ヶ原町大字関ヶ原908-3）と西首塚（岐阜県不破郡関ヶ原町大字関ヶ原2236）があり、西首塚は「JR東海道本線の敷設の際に埋葬されていた白骨が大量に出た」[27]とされていることから、埋没した首塚というのは西首塚のことを指すのかもしれない（現在は西首塚は存在するが、明治19年の時点では西首塚は鉄道の敷地の下になっていた、と推測することもできる）。

下線ｊは、メッケルがそれからさらに「處々の古跡」を視察して、同日（1月8日）の夕方に旅宿に帰った、としている。よって、1月8日の午後にメッケルは首塚を見たあとも同日の夕方まで関ヶ原の戦い関係の「處々の古跡」を視察したことになるが、「處々の古跡」が具体的にどこを指すのかは不明である。

以上のように、1月8日の午前と午後のメッケルの視察について、その具体的行動記録が詳しく判明したが、こうした記事が書かれているということから、岐阜日日新聞の記者がメッケルの一行に同行していたと思われる。

上記のメッケルの視察場所からすると、明治19年の時点で、関ヶ原の戦いの戦跡として、桃配山（徳川家康最初陣跡）、南宮山（毛利、安国寺、長曾我部の陣跡）、笹尾山の石田三成陣跡、陣場野（徳川家康最後陣跡）、首塚などについて、すでに現地比定されていたことがわかり興味深い。

そして、これらの関ヶ原の戦いの戦跡の各所をくまなくメッケルが視察したことは、関ヶ原の戦いに対してメッケルが相当高い関心を持っていたことを示している。

4. 明治時代の日本陸軍の参謀旅行について

明治時代に日本陸軍においておこなわれた参謀旅行には、陸軍大学校の学生を専習員とした陸大参謀旅行（学生参謀旅行）と陸軍の参謀官を専習員とした参謀官参謀旅行がある。

陸軍大学校の参謀旅行（陸大参謀旅行）については、明治16年（1883）2月に参謀本部が定めた陸軍大学校修学概則によれば、参謀旅行は第三年期に受講する科目であった[28]。

明治時代の『官報』では、陸大参謀旅行（学生参謀旅行）については「陸軍大学校学生参謀旅行」（『官報』第712号、明治18年11月13日[29]）、参謀官参謀旅行については「参謀官参謀旅行」（『官報』第1606号、明治21年11月5日、『官報』第1727号、明治22年4月6日[30]）、「参謀官ノ参謀旅行」（『官報』第1881号、明治22年10月4日[31]）と記載されている。

メッケルについては「同校（引用者注：陸軍大学校）御雇教師獨逸国人メツケル」（『官報』第712号、明治18年11月13日[32]）、「教師メッケル」（『官報』第1380号、明治21年2月8日[33]）と記載されている[34]。

参謀官参謀旅行の実施主体については、「陸軍参謀本部ニ於テハ（中略）参謀官参謀旅行ヲ施行セリ」（下線引用者）（『官報』第1606号、明治21年11月5日[35]）、「参謀本部ニ於テハ（中略）参謀官参謀旅行ヲ施行ス」（下線引用者）（『官報』第1727号、明治22年4月6日[36]）、「参謀本部ニテハ（中略）参謀官ノ参謀旅行ヲ施行ス」（下線引用者）（『官報』第1881号、明治22年10月4日[37]）と記載されているので、陸軍参謀本部が参謀官参謀旅行の実施主体である。

明治時代の陸大参謀旅行（学生参謀旅行）と参謀官参謀旅行についてまとめたものが表1である。表1からは以下の諸点が指摘できる。

① メッケル少佐が来日した明治18年以降、参謀旅行は毎年、春と秋に実施されていた。夏と冬には参謀旅行は実施されていないが、これは酷暑や極寒の時期は避けたものと推測される。なお、明治25年12月に参謀官参謀旅行が実施されているが（冬に実施された唯一の例外）、これは同年10月～11月に陸大参謀旅行が実施されたため、時期的に12月にずれ込んだのであろう。

② 明治23年は参謀旅行は実施されていないが、これはヴィルデンブルヒ少佐が明治23年4月27日に帰国（同日に横浜を出港）し、グルートシュライベル少佐が来日したのは翌年の明治24年8月13日（同日に横浜港に到着）した[38]ことによる、と考えられる。つまり、明治23年はヴィルデンブルヒ少佐の同年4月の離日以降、同年中はドイツからの参謀将校が日本に不在であったことによるものであろう。このことから、参謀旅行は統裁官を担当するドイツ陸軍の参謀将校が日本に不在の期間は実施できなかったことがわかる[39]。

③ 参謀旅行の統裁官はメッケル少佐が担当し、メッケル少佐の離日以降はブランケンブルヒ大尉（明治21年4月、少佐に進級）、ヴィルデンブルヒ少佐、グルートシュライベル少佐が統裁官を担当した。なお、明治20年10月の陸大参謀旅行はブランケンブルヒ大尉が統裁官を担当し、メッケル少佐は不参加であった。

④ 参謀旅行の専習員数の人数分布については、陸大参謀旅行では7～17人（平均11.8人〔小数点第二位を四捨五入〕）、参謀官参謀旅行では12～22人（平均15.9人〔小数点第二位を四捨五入〕）であり、参謀官参謀旅行の方が専習員数が多い傾向が見られる。

⑤ 参謀旅行の期間は約3週間という事例が多い。全19例のうち、約3週間は15例、3週間は3例、期間不明は1例である。明治時代の『官報』にも参謀旅行については「凡三週間参謀旅行ヲ施行スルニ付キ」（下線引用者）（『官報』第1380号、明治21年2月8日[40]）、「去ル一日ヨリ凡ソ三週間埼玉、群馬、栃木三縣ヘ参謀官参謀旅行ヲ施行セリ」（下線引用者）（『官報』第1606号、明治21年11月5日[41]）、「一昨二日ヨリ三週間尾張美濃地方ニ於テ参謀官ノ参謀旅行ヲ施行ス」（下線引用者）（『官報』第1881号、明治22年10月4日[42]）と記載されている。

⑥ 参謀旅行は国防（国土防衛）に関する近代戦のシミュレーションをおこなうものであり（明治20年3月～4月

の参謀官参謀旅行、同年11月の参謀官参謀旅行、同21年2月～3月の参謀官参謀旅行[43]）、古戦場に行って実際にあった前近代の戦い（関ヶ原の戦いなど）の戦史研究をおこなうものではない[44]。

⑦ メッケル少佐が統裁官を担当した参謀旅行で岐阜県（関ヶ原の所在地）に行った事例はない。

以上の諸点の中で、上記⑥、⑦からすると、上述した司馬発言A、司馬発言Bは根本的に成立しない（間違っている）内容であることがわかる。

参謀旅行については、『参謀旅行演習記事　東軍之部』（明治二十年九月印刷、陸軍砲兵大尉藤井茂太纂）[45]には「参謀旅行ノ事タルヤ兵学上ノ活劇ナリ」[46]という記載があり、参謀旅行の意義について「兵学上ノ活劇」としている。

そして、冒頭の「大阪地方参謀旅行演習記事緒言」（この緒言〔明治二十年五月〕の執筆は参謀旅行演習統監陸軍歩兵大佐小川又次）には以下のように記されている。

（前略）a 孛国参謀少佐美哥爾氏我カ聘ニ応シ来テ大学ノ教師タリシヨリ屢々其従学将校ヲ率テ参謀旅行を実行セリ（中略）b 其戦略戦術ヲ地形ト時機トニ応用セシムルノ外 c 更ニ教育上無量ノ妙味アルヲ見ル d 実ニ用兵ノ術ヲ教育スルノ良法ト謂フヘシ（後略）（下線引用者）

下線aは、「孛国」（＝プロイセン）の「参謀少佐」の「美哥爾氏」（＝メッケル[47]）が日本に招聘されて「大学」（＝陸軍大学校）の「教師」として陸軍将校を率いて参謀旅行を実行した、としている。この記載からは、メッケル少佐が参謀旅行を日本陸軍に導入したことがわかる。

下線bは、参謀旅行の効果として、その「戦略戦術」を「地形」と「時機」に応用させる、としている。これは、戦争の際の「戦略」と「戦術」を立案するには「地形」と「時機」を読み取ることが重要であり、参謀旅行にそうした効果がある、という意味であろう[48]。

下線cは、参謀旅行の効果として、下線b以外に、参謀旅行が陸軍の参謀将校への教育上多大な効果がある、としている。

下線dは、下線cを具体的に述べたものであり、参謀旅行は用兵術を参謀将校に教育するうえで、すぐれた方法である、としている。

このように、メッケル少佐在任中（メッケル来日3年目）の明治20年5月の時点で、この参謀旅行演習統監の小川又次陸軍歩兵大佐によって参謀旅行の効果を高く評価されている（下線b、下線c、下線d）ことは、注目される。

下線bに「地形」とあるように、参謀旅行で使用する図は地形図であり[49]、江戸時代の布陣図は全く関係なかった。よって、その意味でも、上述した司馬発言A、司馬発言Bは根本的に成立しない（間違っている）内容であることがわかる。

表1を見ると、メッケルの離日後であるが、明治22年10月の参謀官参謀旅行は演習地域は岐阜、愛知両県下であることがわかる。

『明治二十二年十月尾濃地方参謀旅行記事』（陸軍歩兵大尉神尾光臣纂）[50]によれば、この参謀官参謀旅行に参加した陸軍将校などのメンバーは図2のようになる。図2を見ると、この参謀官参謀旅行の編制は、参謀旅行本部（統

監〔陸軍少将１名〕、副官〔陸軍歩兵少佐１名、陸軍歩兵大尉１名〕、補助教官〔陸軍歩兵大佐１名〕、筆記掛〔陸軍歩兵大尉１名、陸軍歩兵中尉１名〕、統裁官１名）、東軍の専修将校（陸軍歩兵少佐２名、陸軍歩兵大尉２名、陸軍砲兵大尉２名など）、西軍の専修将校（陸軍歩兵少佐２名、陸軍歩兵大尉２名、陸軍砲兵大尉２名など）というように３つのパートに分かれている。統裁官は「普国参謀少佐フヲン・ヴェルデンブルヒ」（普国とはプロイセンを指す）である。

前掲『明治二十二年十月尾濃地方参謀旅行記事』（九十九頁）における「混成第五旅団命令」は七箇条が記されているが、関ヶ原（地名としての関ヶ原）の記載がある箇条を引用すると以下のようになる[51]。

混成第五旅団命令　　松　村　少　佐

十月二日午後五時四十分

今須ニ於テ

一　旅団ハ本日関ヶ原及其附近ニ村落露営ヲナサントス

（中略）

四　本隊ノ内衛生隊半部ハ松尾ニ其他ノ諸隊ハ関ヶ原ニ村落露営ヲナス

警急集合所ハ関ヶ原南方ノ畑地トス

（中略）

七　旅団司令部ハ関ヶ原停車場前ニ舎営ス

命令受領ノ為メ諸隊副官ハ今夜十時旅団司令部へ集合スヘシ

混成第五旅団長　某

これらの関係する箇条を読むと、地名としての関ヶ原であり、古戦場としての関ヶ原という意味ではないことがわかる。

また、前掲『明治二十二年十月尾濃地方参謀旅行記事』の中の「参謀旅行記事　西軍ノ部」の「目次」における「作戦九月廿九日三十日十月一日及二日」の「実地作業」における「関ヶ原及附近村落ニ於テ給養品ノ偵察」（下線引用者）という記載があるが、これも地名としての関ヶ原という意味で使われている。

そして、『明治二十二年十月尾濃地方参謀旅行記事、附図』[52]を見ても、図は当時の現況の地図（近代の地図）であって、関ヶ原の戦いの布陣図ではないことがわかる。

参謀旅行について、前掲・林三郎『参謀教育』[53]には、「メッケル少佐の貢献」として以下のように記されている。

> 彼（引用者注：メッケル少佐）は、参謀旅行では、野外の未知の地方を演習地とし、専習員を二班に分けて各自に演習上の役職を与え、対抗行動をとらせて戦況を進めた。そして、変転する戦況に応じて、参謀としての命令起案能力や、地形判断能力の向上をはかる目的で、いろいろな問題を課した。その実際的な教育法の成果を、当時の陸軍首脳部は高く評価していた。（下線引用者）

この記載からも、メッケルが導入した参謀旅行は、近代戦のシミュレーションをもとに参謀の「命令起案能力や、

地形判断能力の向上をはかる」ことが目的であって、戦史研究とは全く異なる内容であったことは明白である[54]。

そして、メッケル少佐が陸軍大学校では戦史を講義していない点にも注意したい。前掲・林三郎『参謀教育』[55]には、以下のように記されている。

> メッケル少佐の陸大での教育課目は、前述のように、戦術実施（実施帥兵術、実体は応用戦術）、兵棋、それに参謀旅行の三つだけであった。世間の一部に伝えられている、戦史、軍制学、戦争学、謀略などをも講義したとの説は、いずれも根拠のない憶説である。
>
> 一方、彼のあとの三名のお雇い教師は、前述の三課目のほかに、戦史などをも講義している。なぜメッケル少佐だけが戦史を講義しなかったのか、その辺の事情は明らかでない。

この記載からは、陸軍大学校でのメッケル少佐の教育課目に戦史は含まれていなかったことが明記されている。メッケル少佐の後任の3名（ブランケンブルヒ大尉、ヴィルデンブルヒ少佐、グルートシュライベル少佐）が戦史を講義したのに対して、メッケル少佐が戦史を講義しなかった点について「その辺の事情は明らかでない」としているが、ドイツ本国ではメッケルは戦術教官歴が長かった点が関係しているのかもしれない。

前掲・林三郎『参謀教育』[56]には、メッケルが1877年に陸軍大学校戦術教官になったこと、メッケルの軍歴上の特徴として戦術教官歴が長かったこと、メッケルには戦術関係の著書が多く、来日までの著書の主なものとして、『兵棋教範』(1872年)、『戦術学』(1873年)、『兵棋入門』(1874年)、『独逸基本戦術』(1877年)、『要塞軍及び野戦軍』(1878年)、『戦時帥兵術』（1882年)、『初級戦術学教程』（1883年）などがあったことが記されている。これらの著書に戦史関係のものがなかったことは注意される。

また、前掲・林三郎『参謀教育』[57]には、「戦争理論研究の閑却」として以下のように記されている。

> 上述のように、陸大は開校の当初から日露開戦頃まで、戦争理論を殆ど研究しなかった。また、戦史を通じての戦争研究も、同様に閑却していた。（下線引用者）

この記載によれば、参謀旅行と戦史研究を結び付けること自体に無理があることがわかる。

おわりに

メッケルの関ヶ原視察とメッケル伝説について考えるうえで、岐阜県図書館（サービス課郷土・地図情報係）による、当時の岐阜日日新聞の調査によって、明治19年1月8日にメッケルが関ヶ原を視察したことが証明されたことの意義は大きい。

これまでメッケルが関ヶ原を視察したことについては、疑問視する向きが多かったが、岐阜県図書館（サービス課郷土・地図情報係）による岐阜日日新聞という一次史料の調査によって、疑問視する見解は完全に覆されたのである。

司馬発言Ａ、司馬発言Ｂでは、メッケル伝説について、参謀旅行（陸大参謀旅行〔学生参謀旅行〕、参謀官参謀旅行）という点は誤認しているが、上述したように、メッケルの視察（冬季休暇中の私的な旅行としての地理実査）は、相当なVIP待遇であり、6名（そのうち1名は名古屋鎮台の陸軍大尉）を引き連れ、さらに1月8日午後の視察では、案内役として地元の役人2名も加わったのであるから、メッケル伝説の話を聞いた司馬氏が参謀旅行と誤認したのも無理はないと言えよう。

そう考えると、上述したように、テレビ番組の『日本史探訪』において、司馬氏が自信満々にメッケル伝説を語った様子も納得できるのである。

上述したように、岐阜日日新聞の記事に「古記録、古図等を取り寄せ、種々其履歴等を諮問し」（下線ｅ）とあることから、「古図」の中に江戸時代に流布した関ヶ原の戦いの布陣図が含まれていたとすると、その点は司馬発言Ｂと符合する。

司馬発言Ａ、司馬発言Ｂにおけるメッケルの具体的な発言とされる内容は典拠が不明であり（つまり、メッケルの発言内容の真偽も不明ということになる）、司馬氏が昭和30年代初頭にだれから聞いたのかが問題になる。

上述したように、司馬発言Ａと司馬発言Ｂの内容が矛盾している箇所があることから、司馬発言Ａ、司馬発言Ｂの典拠が文字資料である可能性は低いと思われる。

なお、司馬発言Ａ、司馬発言Ｂの内容は、あくまで司馬氏がテレビ番組などで発言したものであり、司馬氏が作品として執筆したものでない、という点についても注意する必要がある。つまり、メッケル伝説が一定程度の信憑性を持った内容であれば、司馬氏は作品の中でこのことを執筆していたはずであろうから、そのあたりの線引きを司馬氏自身が意識していたのかもしれない。

司馬発言Ａ、司馬発言Ｂのルーツ（情報源）について、昭和の文豪との交遊や昭和の文壇との関係が推測されるとすれば、山岡壮八、吉川英治、柴田錬三郎、池波正太郎、井上靖、大仏次郎、藤沢周平などの歴史小説関係の昭和の文豪の作品にメッケル伝説やそれに類似した話が出てくるのかどうかを調べることも今後必要かもしれない。

司馬氏が昭和30年代初頭にだれから聞いたのかという問題は、昭和30年の時点から遡及すると、メッケルの関ヶ原視察は69年前であり、メッケルの関ヶ原視察に同行した関係者が存命していた可能性は低いものの、その子孫（関係者の子供など）や関係者（関係者の関係者）からの2次伝聞であった可能性も考えられる。

このように、司馬発言Ａ、司馬発言Ｂのルーツ（情報源）については、昭和の文壇との関係のルート、或いは、メッケルの関ヶ原視察に同行した関係者のルート、という2つの可能性が考えられるが、その点の詳しい検討は今後の課題となる。

［註］

（１）乃至政彦『戦国の陣形』（講談社、2016 年、162 ～ 165 頁）。

（２）メッケルに関する参考文献で最も詳しくわかりやすいのは林三郎『参謀教育－メッケルと日本陸軍－』（芙蓉書房、1984 年）である（以下、サブタイトルは省略する）。本稿の作成においてもこの本の記載から多くの御教示を得た。そのほか、メッケル関係の参考文献については、宿利重一『日本陸軍史研究メッケル少佐』（日本軍用図書株式会社、1944 年）、安井久善「メッケル少佐のわが兵学に及ぼした影響」（『軍事史学』第 4 号第 4 巻〔第 4 巻第 4 号ヵ〕、通巻第 16 号、軍事史学会編集、軍事研究社発行、1969 年）、中村赳「メッケル少佐新考」（『軍事史学』第 10 巻第 4 号、通巻第 40 号、軍事史学会編集、並木書房発行、原書房発売、1975 年）、瀬戸利春「日本陸軍近代化の父クレメンス・メッケル」（『歴史群像』2006 年 8 月号、No.78、2006 年、学習研究社）などがある。前掲・宿利重一『日本陸軍史研究メッケル少佐』は国立国会図書館デジタルコレクション（https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1062760）で閲覧できる。

（３）machida77 氏のブログ『火薬と鋼』の「「関ヶ原でメッケルは西軍が勝つと言った」件」（https://machida77.hatenadiary.jp/entry/20130301/p1、最終閲覧日：2022 年 3 月 15 日）。

（４）司馬遼太郎、松本清張、構成鈴木健次「天下を分けた大激戦の明暗　関ヶ原」（司馬遼太郎『司馬遼太郎の日本史探訪』、株式会社 KADOKAWA、1999 年、107 ～ 108 頁）。

（５）前掲・林三郎『参謀教育』（45、211 頁）。

（６）司馬遼太郎「関ケ原私観」（司馬遼太郎『歴史と風土』、文藝春秋、1998 年、43 ～ 46 頁）。

（７）前掲・司馬遼太郎『歴史と風土』における目次の次のページ（ページ番号なし）における記載。

（８）前掲・司馬遼太郎『歴史と風土』（52 頁）。

（９）フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』の「坂の上の雲」（https://ja.wikipedia.org/wiki/ 坂の上の雲、最終閲覧日：2022 年 3 月 15 日）。

（１０）司馬遼太郎『坂の上の雲』一（文藝春秋、1969 年、135 ～ 143 頁）。

（１１）前掲・司馬遼太郎『坂の上の雲』一（142 ～ 143 頁）。

（１２）司馬遼太郎『坂の上の雲』六（文藝春秋、1972 年、342 ～ 346 頁）。『坂の上の雲』六は最後の巻である。

（１３）フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』の「司馬遼太郎」（https://ja.wikipedia.org/wiki/ 司馬遼太郎、最終閲覧日：2022 年 3 月 15 日）。

（１４）前掲・フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』の「司馬遼太郎」。

（１５）講談倶楽部賞受賞作・候補作一覧のサイト（https://prizesworld.com/prizes/novel/kdcb.htm）。

（１６）前掲・フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』の「司馬遼太郎」。

（１７）フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』の「直木三十五賞」（https://ja.wikipedia.org/wiki/ 直木三十五賞、最終閲覧日:2022 年 3 月 15 日）。前掲･フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』の「司馬遼太郎」では直木賞の受賞を昭和 35 年（1960）としているが（最終閲覧日：2022 年 3 月 15 日）、昭和 34 年（1959）が正しい。

（１８）前掲・フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』の「司馬遼太郎」。

（１９）海音寺潮五郎『武將列傳四』（文藝春秋新社、1961 年、53 ～ 54 頁）の「石田三成」。

（２０）フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』の「海音寺潮五郎」（https://ja.wikipedia.org/wiki/ 海音寺潮五郎、最終閲覧日：2022 年 3 月 15 日）。

（２１）前掲・海音寺潮五郎『武將列傳四』（291 頁）。

（２２）前掲・林三郎『参謀教育』（211 ～ 224 頁）。

（２３）「レファレンス協同データベース」（https://crd.ndl.go.jp/reference/、最終閲覧日：2022 年 8 月 15 日）。

（２４）岐阜県立図書館ではなく岐阜県図書館が公称である。岐阜県図書館の御教示によれば、この調査をおこなった部署は、岐阜県図書館のサービス課郷土・地図情報係である。

（２５）引用にあたり、文中において適宜、読点（＝「、」）を付けた。引用にあたり、文中において適宜、旧字体を新字体に改めた字がある。

（２６）メッケルの「地理実査」の際には、通訳として佐官クラスの陸軍将校が同行している。例えば、明治 19 年 7 月の相模、伊豆、駿河地方への「地理実査」には、陸大幹事岡本大佐、陸大御用掛遠藤二等軍吏が通訳として同行している（前掲・林三郎『参謀教育』、216 頁）。

（２７）「西首塚」（https://www.sekigahara1600.com/spot/nishikubizuka.html、最終閲覧日：2022 年 8 月 15 日）。

（２８）前掲・林三郎『参謀旅行』（32 ～ 34 頁）の修学概則で定められた学術教程の科目表による。前掲・林三郎『参謀旅行』（32 頁）には「科目のうち最も重要視されていたのは、参謀旅行であった。三年学生の期末大試験後、おおよそ二ヵ月にわたって、参謀官任務の実施を演習すると（引用者注：修学概則に）記されている。」と記載されている。ただし、実際の陸大参謀旅行の実施期間は 3 週間、或いは、約 3 週間であった（本稿の表 1 参照）。

（２９）『官報』第 712 号、明治 18 年 11 月 13 日（国立国会図書館デジタルコレクション〔https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2964146〕、最終閲覧日：2022 年 3 月 15 日）。

（３０）『官報』第 1606 号、明治 21 年 11 月 5 日、『官報』第 1727 号、明治 22 年 4 月 6 日（国立国会図書館デジタルコレクション〔https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2964146〕、最終閲覧日：2022 年 3 月 15 日）。

（３１）『官報』第 1881 号、明治 22 年 10 月 4 日（国立国会図書館デジタルコレクション〔https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2964146〕、最終閲覧日：2022 年 3 月 15 日）。

（３２）『官報』第 712 号、明治 18 年 11 月 13 日（国立国会図書館デジタルコレクション〔https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2964146〕、最終閲覧日：2022 年 3 月 15 日）。

（３３）『官報』第 1380 号、明治 21 年 2 月 8 日（国立国会図書館デジタルコレクション〔https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2964146〕、最終閲覧日：2022 年 3 月 15 日）。

（３４）メッケルは、明治 21 年 2 月の九州地方参謀旅行専習員の集合写真（前掲・林三郎『参謀教育』の口絵写真）を見ると、最前列の向かって右から 3 番目に座っている。その写真を見ると、メッケルはカイゼル髭を蓄え軍服が窮屈そうに見えるくらい恰幅がよく、堂々とした威厳がある風貌である。前掲・林三郎『参謀教育』（125 頁）には「彼（引用者注：メッケル）は身長一メートル七五センチで、がっしりした体軀の持ち主で

あった」と記されている。

（３５）『官報』第 1606 号、明治 21 年 11 月 5 日（国立国会図書館デジタルコレクション〔https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2964146〕、最終閲覧日：2022 年 3 月 15 日）。

（３６）『官報』第 1727 号、明治 22 年 4 月 6 日（国立国会図書館デジタルコレクション〔https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2964146〕、最終閲覧日：2022 年 3 月 15 日）。

（３７）『官報』第 1881 号、明治 22 年 10 月 4 日（国立国会図書館デジタルコレクション〔https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2964146〕、最終閲覧日：2022 年 3 月 15 日）。

（３８）前掲・林三郎『参謀教育』（133、138 頁）。

（３９）前掲・林三郎『参謀教育』（169 頁）には、陸大第六期生の参謀旅行の統裁官は中村覚少佐であったことが記されているので、この陸大参謀旅行が明治 23 年に実施された可能性はある。

（４０）『官報』第 1380 号、明治 21 年 2 月 8 日（国立国会図書館デジタルコレクション〔https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2964146〕、最終閲覧日：2022 年 3 月 15 日）。

（４１）『官報』第 1606 号、明治 21 年 11 月 5 日（国立国会図書館デジタルコレクション〔https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2964146〕、最終閲覧日：2022 年 3 月 15 日）。

（４２）『官報』第 1881 号、明治 22 年 10 月 4 日（国立国会図書館デジタルコレクション〔https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2964146〕、最終閲覧日：2022 年 3 月 15 日）。

（４３）この参謀官参謀旅行に参加した陸軍将校などのメンバーは図 1 のようになる。

（４４）よって、メッケルが関ヶ原の戦いの勝敗を判定することや、メッケルが石田方の勝ちを強硬に主張することは有り得ないことがわかる。そして、上述した司馬発言Ａの下線ｄ、下線ｅ、司馬発言Ｂの下線ｆ、下線ｇ、下線ｉのメッケルの発言についてもあり得ないことがわかる。

（４５）『明治二十年四月参謀旅行演習記事　東軍之部』（明治二十年九月印刷、陸軍砲兵大尉藤井茂太纂）（国立国会図書館デジタルコレクション〔https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/843574〕、最終閲覧日：2022 年 3 月 15 日）。『参謀旅行記事』は参謀旅行実施後の報告書に該当する。

（４６）引用文中の旧字体は新字体に改めた。

（４７）「美哥爾」をピンイン形式（中国語の読み方）で発音すると「メイクゥーアール」となるので、この場合、「メッケル」を指していることになる。

（４８）明治 19 年 3 月～同年 4 月の参謀官参謀旅行において、同年 3 月 29 日、府中に集合した専習員に対して、統裁官のメッケルは「参謀旅行の目的は、現地において地形を学び、又地形に応ずる用兵法を研究するにある」（下線引用者）と注意を与えている（前掲・林三郎『参謀教育』92 頁）。このことから、参謀旅行の目的が戦史研究でなかったことは明白である。

（４９）尾留川正之「初期の参謀演習使用地図考」（『地図』48 巻 2 号、日本地図学会、2010 年）。前掲・尾留川正之「初期の参謀演習使用地図考」では「3 人のドイツ将校の教師（引用者注：メッケル、ブランケンブルヒ、ヴィルデンブルヒ）は、参謀教育で最も重視され、地図を必須とする参謀旅行を我国に根付かせていく」（下線引用者）と指摘されている。

（５０）『明治二十二年十月尾濃地方参謀旅行記事』（陸軍歩兵大尉神尾光臣纂）（国立国会図書館デジタルコレクション〔https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/843601〕、最終閲覧日：2022 年 3 月 15 日）。

（５１）引用文中の旧字体は新字体に改めた。

（５２）『明治二十二年十月尾濃地方参謀旅行記事、附図』（国立国会図書館デジタルコレクション〔https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/843602〕、最終閲覧日：2022 年 3 月 15 日）。

（５３）前掲・林三郎『参謀教育』（162 ～ 163 頁）。

（５４）前掲・安井久善「メッケル少佐のわが兵学に及ぼした影響」には「メッケルがその滞日三年の間に数次にわたって行なった「参謀旅行」と呼ばれた現地戦術は、あくまで現地地形に即した綜合的指導であったわけである。（中略）この方式を通じて野戦軍がいかに効果的に会戦を遂行するかを具体的に学んだわけであった。」（下線引用者）と記されている。この記載において、「参謀旅行」＝「現地戦術」としているので、この点からも参謀旅行が戦史研究とは全く異なる内容であったことがわかる。

（５５）前掲・林三郎『参謀教育』（167 頁）。

（５６）前掲・林三郎『参謀教育』（45 頁）。

（５７）前掲・林三郎『参謀教育』（192 頁）。

表１

明治時代に日本陸軍で実施された参謀旅行

（林三郎『参謀教育－メッケルと日本陸軍－』（注１）より）

参謀旅行の区分	実施期間	演習地域	統裁官	専習員数	想定等	備考
●陸大参謀旅行	明治 18 年（1885） 11 月 5 日～同月 25 日 （約 3 週間）	主として千葉、茨城の両県下（松戸、取手、石岡、水戸、笠間、真岡）	メッケル少佐	15 名	陸大第一期生 15 名を南軍、北軍の二班に分けた。（注 2）想定兵力は師団。	メッケル来日 1 年目
★参謀官参謀旅行 国会デジタル	明治 19 年（1886） 3 月 29 日～ 4 月 19 日 （3 週間）	東京府下、及び山梨、神奈川両県下（府中、八王子、吉野、上野原、川尻、原町田、神奈川）	メッケル少佐	12 名	専習員 12 名（参謀本部の課員）を東軍、西軍に分けた。想定兵力は師団。	（注 3） メッケル来日 2 年目
●陸大参謀旅行 国会デジタル	明治 19 年（1886） 11 月 2 日～同月 24 日 （約 3 週間）	千葉県下（木更津、鶴舞、一ノ宮、長者、勝浦、大多喜、茂原）	メッケル少佐	9 名	陸大第二期生 9 名を南軍、北軍の二班に分けた。想定兵力は師団。	メッケル来日 2 年目
★参謀官参謀旅行 国会デジタル	明治 20 年（1887） 3 月 25 日～ 4 月 17 日 （約 3 週間）	大阪地方（神戸、西宮、伊丹、茨木、大阪）	メッケル少佐 （注 4）	22 名	神戸付近に上陸した西軍（侵入軍）と、これを迎え撃つ東軍（日本軍）という設想で師団の攻防を教育する。専習員 22 名。（注 5）	（注 6） メッケル来日 3 年目
●陸大参謀旅行	明治 20 年（1887） 10 月 12 日～同月 30 日 （約 3 週間）	小田原、熱海、三島、修善寺付近	ブランケンブルヒ大尉（注 7）（注 8）	7 名	軍隊鉄道輸送問題も含まれていた。陸大第三期生。	メッケル来日 3 年目
★参謀官参謀旅行 国会デジタル	明治 20 年（1887） 11 月 4 日～同月 27 日 （約 3 週間）	沼津付近、富士山西側地区、甲府盆地（沼津付近、御殿場、吉原、富士川流域の大宮、身延山を経て甲府平地）	メッケル少佐 （注 9）	16 名	東軍（日本軍）が国土防衛軍、西軍が侵入軍、その西軍の一個師団が沼津付近に上陸したのに対して、東軍師団がそれに反撃を加える。（注 10）参謀官 16 名。	メッケル来日 3 年目
★参謀官参謀旅行 国会デジタル	明治 21 年（1888） 2 月 11 日～ 3 月 4 日 （約 3 週間）	九州北部地域（馬関、小倉、芦屋、福岡、博多、飯塚）	メッケル少佐 （注 11）（注 12）	15 名	国防軍（日本軍）と上陸軍に分けられた。（注 13）参謀官ら 14 名。	メッケル来日 4 年目 （注 14）

●陸大参謀旅行 国会デジタル	明治 21 年（1888） 10 月 6 日～同月 26 日 （約 3 週間）	両毛地方（佐野、足利、太田、伊勢崎、前橋付近）（注 15）	ブランケンブルヒ少佐（注 16）	13 名	陸大第四期生を専習員とする。南軍（日本軍）、北軍の東京近辺での決戦。（注 17）	
★参謀官参謀旅行 国会デジタル	明治 21 年（1888） 11 月 1 日～同月 20 日 （約 3 週間）	埼玉、群馬、栃木の三県下	ヴィルデンブルヒ少佐（注 18）	15 名		（注 19）
★参謀官参謀旅行	明治 22 年（1889） 4 月 2 日～同月 24 日 （約 3 週間）	埼玉、神奈川両県下	ヴィルデンブルヒ少佐	16 名		（注 20）
★参謀官参謀旅行 国会デジタル	明治 22 年（1889） 10 月 1 日（ママ）（2 日ヵ）～ 同月 20 日（注 21） （約 3 週間）	岐阜、愛知両県下	ヴィルデンブルヒ少佐	16 名		（注 22）
●陸大参謀旅行	明治 22 年（1889） 10 月 31 日～ 11 月 21 日 （3 週間）	福島、栃木両県下	ヴィルデンブルヒ少佐	10 名	陸大第五期生を専習員とする。	（注 23）
●陸大参謀旅行	明治 24 年（1891） 10 月 20 日～ 11 月 9 日 （3 週間）	八王寺、高崎、足利、栃木、宇都宮付近	グルートシュライベル少佐	9 名	陸大第七期生	（注 24）
★参謀官参謀旅行	明治 25 年（1892） 3 月 6 日～同月 30 日 （約 3 週間）	京都、大阪、奈良、和歌山、兵庫の五府県下	グルートシュライベル少佐			
●陸大参謀旅行	明治 25 年（1892） 10 月 28 日～ 11 月 17 日 （約 3 週間）	栃木、福島両県下	グルートシュライベル少佐	17 名	陸大第八期生	
★参謀官参謀旅行	明治 25 年（1892） 12 月上旬～ （約 3 週間）	千葉、茨城両県下	グルートシュライベル少佐			

★参謀官参謀旅行	明治 26 年（1893） 4 月 17 日～ 5 月 7 日 （約 3 週間）	福山、尾道、四日市付近	グルートシュライベル少佐	15 名		
●陸大参謀旅行	明治 26 年（1893） 10 月 6 日～		グルートシュライベル少佐（注 25）	14 名	陸大第九期生	
★参謀官参謀旅行	明治 27 年（1894） 4 月 30 日～ 5 月 20 日 （約 3 週間）	福島、宮城両県下	グルートシュライベル少佐	16 名		

【凡例】●…陸大参謀旅行（学生参謀旅行）、★…参謀官参謀旅行

国会デジタル…国立国会図書館デジタルコレクション（https://dl.ndl.go.jp）において「参謀旅行記事」で検索して、その「参謀旅行記事」が閲覧できるもの。ただし、明治 20 年 4 月のものは「参謀旅行演習記事」で検索して、その「参謀旅行演習記事」が閲覧できる。

（注 1）林三郎『参謀教育－メッケルと日本陸軍－』（芙蓉書房、1984 年）。以下、サブタイトルは省略する。

（注 2）陸大 3 年学生（15 名）は第一期生であり、2 年学生（14 名）は第二期生である（前掲・林三郎『参謀教育』、48 頁）。

（注 3）統監は参謀本部陸軍部第二局長の小川又次大佐（前掲・林三郎『参謀教育』、89 頁）。

（注 4）副統裁官はブランケンブルヒ大尉（前掲・林三郎『参謀教育』、129 頁）。

（注 5）統監は参謀本部陸軍部第二局長の小川又次大佐。補助官は前年（明治 19 年）末に来日したブランケンブルヒ大尉（前掲・林三郎『参謀教育』、94 頁）。

（注 6）専習員は、軍医部及び会計部の佐尉官相当官 4 名が新たに加わり、参謀官も参謀本部課員のほか、参謀本部課長、近衛参謀、各鎮台参謀と多彩になった（前掲・林三郎『参謀教育』、95 頁）。

（注 7）メッケル少佐は不参加（前掲・林三郎『参謀教育』、221 ～ 222 頁）。

（注 8）来日 3 年目（明治 20 年）に、メッケル教師が陸大で担当した授業は、二、三年学生合同の実施帥兵術だけであった。というのは、これまで彼が担当してきた、三年学生の兵棋と参謀旅行の統裁は、新来のブランケンブルヒ大尉にまかせ、彼自身は参謀官参謀旅行などに専念したからである（前掲・林三郎『参謀教育』、71 頁）。

（注 9）統監は参謀本部次長小沢武雄中将、副統監が参謀本部第二局長小川又次大佐、統裁官と補助官は前回と同じく、メッケル少佐とブランケンブルヒ大尉であった（前掲・林三郎『参謀教育』、101 頁）。

（注 10）日本軍と侵入軍という設想では、春の参謀旅行（引用者注：明治 20 年 3 月 25 日～ 4 月 17 日の参謀官参謀旅行）と大体同じである（前掲・林三郎『参謀教育』、103 頁）。

（注 11）明治 21 年春の参謀官参謀旅行は、国土防衛策研究の総括として北九州で行われる。統監は小澤武雄中将、統裁官がメッケル、副統裁官がブランケンブルヒである（尾留川正之「初期の参謀演習使用地図考」、『地図』48 巻 2 号、日本地図学会、2010 年）。統監が参謀本部次長小沢武雄中将、統裁官がメッケルであったことは、前掲・林三郎『参謀教育』（112、114 頁）にも記されている。

（注 12）メッケル少佐にとっては、陸大参謀旅行を含めて通算六回目の、そして在日最後のものであった。（中略）このように九州参謀旅行の特徴は、国土防御策案研究の延長である点にあった。従って、専習員も従来とは違い、国防作戦関係の錚々たる顔触れであった（前掲・林三郎『参謀教育』、108 頁）。

（注 13）概ね日本陸軍の現配置のもとで、動員を完了した国防軍と、九州北部に侵入した上陸軍との攻防を、実地に研究するものであった（前掲・林三郎『参謀教育』、109 頁）。

（注 14）九州参謀官参謀旅行（2 月 11 日～ 3 月 4 日）終了後、メッケルは 3 月 7 日に帰京し、同月 17 日に三ヵ年の契約期限が満期になり、同月 24 日午前、イギリス船グーリック号に乗って、帰国の途についた（前掲・林三郎『参謀教育』、117 ～ 118、223 ～ 224 頁）。

（注 15）『明治廿一年十月両毛地方参謀旅行記事　全』（国立国会図書館デジタルコレクション〔https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/843597〕、最終閲覧日：2022 年 3 月 15 日）では、「両毛地方」としている。

（注 16）明治 21 年 4 月にブランケンブルヒは大尉から少佐に進級した（前掲・林三郎『参謀教育』、129 頁）。

（注 17）『明治廿一年十月両毛地方参謀旅行記事　全』（国立国会図書館デジタルコレクション〔https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/843597〕、最終閲覧日：2022 年 3 月 15 日）の一般方略では、「南北両軍ハ東京近辺ニ於テ決戦ヲ期ス」としている。

（注 18）副統裁官はブランケンブルヒ少佐（前掲・林三郎『参謀教育』、129 頁）。

（注 19）統裁官のヴィルデンブルヒ少佐は来日 1 年目であった（前掲・林三郎『参謀教育』、132 頁）。

（注 20）統裁官のヴィルデンブルヒ少佐は来日 2 年目であった（前掲・林三郎『参謀教育』、133 頁）。

（注 21）『官報』第 1881 号、明治 22 年 10 月 4 日（国立国会図書館デジタルコレクション〔https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2964146〕、最終閲覧日：2022 年 3 月 15 日）には、「一昨二日ヨリ三週間尾張美濃地方ニ於テ参謀官ノ参謀旅行ヲ施行ス」（下線引用者）と記載されていて、この参謀官参謀旅行の開始日を 10 月 2 日から、としている。

（注 22）統裁官のヴィルデンブルヒ少佐は来日 2 年目であった（前掲・林三郎『参謀教育』、133 頁）。

（注 23）統裁官のヴィルデンブルヒ少佐は来日 2 年目であった（前掲・林三郎『参謀教育』、133 頁）。

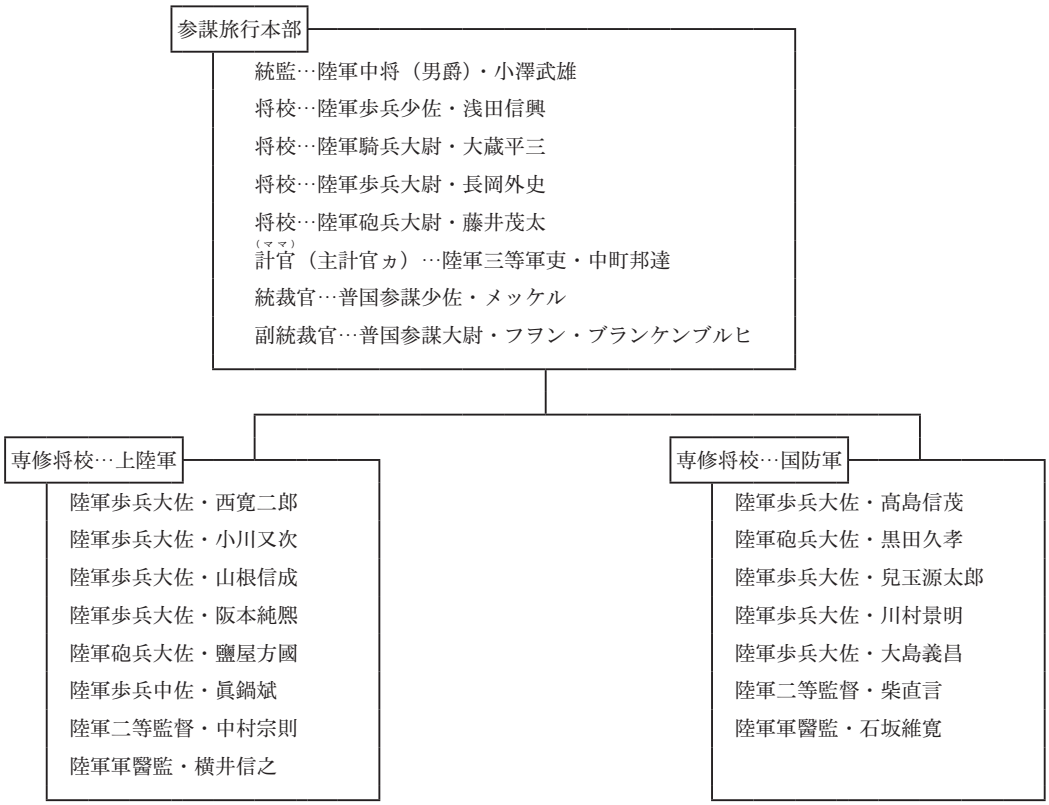
（注 24）統裁官のグルートシュライベル少佐は来日 1 年目であった（前掲・林三郎『参謀教育』、139 頁）。

（注 25）統裁官のグルートシュライベル少佐が 10 月 9 日に沼津付近で落馬負傷したため、そのあとの統裁は、第一期生でドイツ帰りの教官の東条英教少佐が引き受けた（前掲・林三郎『参謀教育』、140 頁）。

※陸大第六期生参謀旅行の統裁官は中村覚少佐であったが（前掲・林三郎『参謀教育』、169 頁）、実施期間、演習地域、専習員数については、前掲・林三郎『参謀教育』には記載がない。

図１

明治21年２月11日～３月４日の参謀官参謀旅行（九州北部地域）の編制



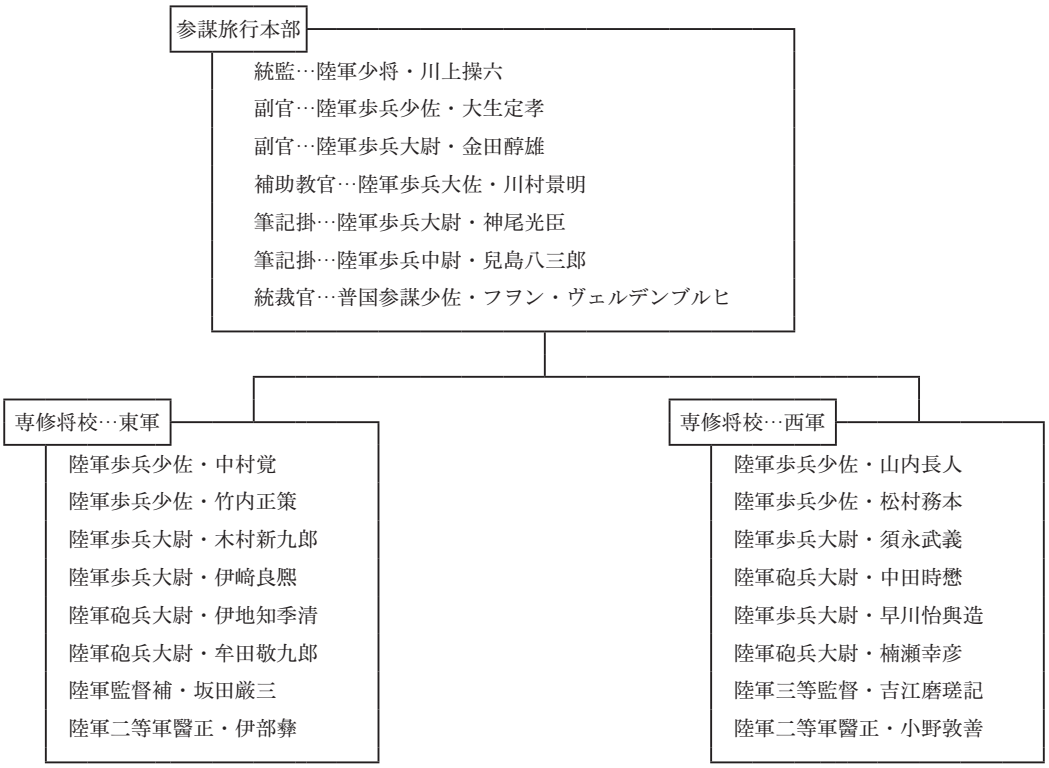
※図１は『明治二十一年二月参謀旅行記事　上陸軍之部』（陸軍歩兵大尉長岡外史纂）の「例言」における「一今回施行セシ旅行本體ノ将校ハ左ノ如シ」とある箇所の記載をもとに図化したものである。

※この「例言」において、伏見宮殿下、北白川宮殿下が作戦初日よりこの参謀旅行を御覧になったことについて、「別ニ特筆スヘキモノアリ」と記載されている。

※メッケル少佐は明治21年（1888）３月24日に帰国したので（同日に横浜港出港）、この参謀官参謀旅行が日本国内最後の参謀旅行になった。

図 2

明治 22 年 10 月 2 日～同月 20 日の参謀官参謀旅行（尾濃地方）の編制



※ 図 2 は『明治二十二年十月尾濃地方参謀旅行記事』（陸軍歩兵大尉神尾光臣纂）の「凡例」における「一　本回ノ参謀旅行ニ従事セシ将校左ノ如シ」とある箇所の記載をもとに図化したものである。

※ メッケル少佐は明治 21 年（1888）3 月にドイツへ帰国したので、明治 22 年 10 月の参謀官参謀旅行（尾濃地方）には参加していない。